

特集

トキが舞ういしかわを目指して



平成28年11月19日、石川県民の多くが待ち望んでいたトキの一般公開がいしかわ動物園内の「トキ里山館」で始まりました。新潟県佐渡市以外でのトキの公開は石川県が初めてとなります。本特集ではそれを記念して、石川県とトキの関わりから一般公開に至るまでの道のりをご紹介します。

1. トキと石川県との関わり

◆ 本州最後のトキが生息した石川県

トキはかつて日本中で普通に見られた鳥でしたが、乱獲や生息環境の悪化によってその数は激減し、昭和9年に国の天然記念物に指定されています。当時、トキは本州各地で姿を消しつつありましたが、石川県には少数ながらも生息していました。しかし、トキが生息していた邑知潟は、昭和初期から始まった干拓によってえさ場であった水辺の環境が大きく変化し、ねぐらがあった眉丈山一帯も戦時中に木材利用や食糧増産等のために伐採が進んで、トキが安心して暮らせる林はどんどんなくなっていったのです。加えて、戦後の一時期に使われていた毒性の強い農薬が、



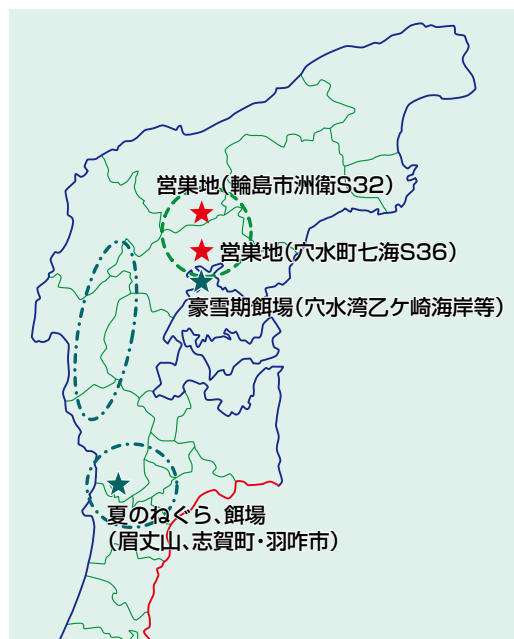
飛翔するトキ（環境省提供）

トキやその他の生き物に影響をおよぼしたと考えられています。

昭和30年代以降、トキが生息していた羽咋市、穴水町やトキ保護会（民間）などによりトキの保護活動が行われるとともに、石川県トキ保護連絡協議会が結成され、官民一体となった活動が実施されました。しかし、こうした活動もむなしく、石川県のトキは年々その数を減らしていき、昭和39年にはとうとう1羽だけになってしまいました。能里と名付けられたこのトキは、昭和45年に穴水町で捕獲され、人工繁殖のために佐渡に移されましたが、1年が過ぎた昭和46年3月に死亡しました。

こうした経緯から、石川県はトキに大変ゆかりの深い県だと言えます。県内のトキ生息記録は江戸時代初期からあり、昭和36年まで能登半島で繁殖していたことが確認されています。石川県には

能登のトキ生息分布図



石川県におけるトキの記録の概要

江戸時代初期	加賀藩史料にトキの生息の記録
明治時代～	乱獲や生息環境の悪化が進み、急速に生息数が減少
昭和4年	眉丈山中でトキが誤射され、能登半島でのトキの生存が確認
昭和14年	眉丈山で20羽近くの群れを確認
昭和27年	特別天然記念物に指定(能登半島と佐渡島に生息)
昭和32年	輪島市洲衛のアカマツ林で繁殖確認(2羽巣立ち)
昭和36年	穴水町七海のアカマツ林で繁殖確認(2羽巣立ち)、眉丈山で5羽確認
昭和39年～	トキ1羽となる
昭和45年	国の指示により、本州最後のトキ「能里」を穴水町で捕獲、佐渡トキ保護センターへ移送
昭和46年	能里が死亡

コラム トキ保護にかけた情熱・村本義雄さん



村本義雄さん

羽咋市に住む村本義雄さんは、トキが生息していた眉丈山の山ろくの町で生まれ育ち、早くからトキに注目してその生態を記録するなど、半世紀以上にわたってトキの保護に尽力してきました。

村本さんは「自然保護」という考えが浸透していない時代から、自然と人間生活の関わり大切さを訴え続け、能登のトキ保護に大きく貢献しました。

さらに、日本のトキが絶滅した後も中国のトキの保護に力を注ぎ、平成13年にNPO法人日本中国朱鷺保護協会を設立、能登半島でのトキの生態研究等の実績をもとに、中国のトキ保護増殖活動の支援や、中国陝西省洋県のトキ救護飼養センター等との交流などにも尽力し、90歳を超える現在も、トキ保護のための講演活動などを精力的に行っています。

今でも、トキが能登半島に生息していた頃の記憶をとどめる県民が多く、「トキはドウと呼ばれていた」「珠洲の水田でエサを食べている姿を見た」「夕日を受けて羽を広げて飛ぶ姿は今も忘れることができない」など、昭和10～40年頃のトキの情報が能登半島のほぼ全域から寄せられています。

2. トキが日本の空に戻るまで

◆ トキ野生復帰に向けた取り組み

本州最後のトキ「能里」が能登で捕獲され、繁殖のために佐渡へ移されたのと同じように、昭和56年には国内で最後に残っていた5羽が佐渡で捕獲され、日本の野生のトキは姿を消すことになりました。その後、懸命な努力を重ねましたが、トキの人工繁殖は思うように進まず、平成15年には日本産のトキは絶滅してしまいました。

その一方で、平成11年に中国から贈られた「友友」^{ヨウヨウ}「洋洋」^{ヤンヤン}のペアによる人工繁殖は成功し、同年に、飼育下では日本初となるトキの雛「優優」^{ユウユウ}が誕生しました。その後も、個体数は順調に増え、現在国内では170羽を超えるトキが飼育されています。

飼育個体数が増加したことで、国はトキの野生復帰の取り組みを平成15年にスタートさせます。佐渡島では、トキの棲める自然環境を再生するための取り組みが続けられ、平成20年、野生順化訓練を行ったトキが佐渡島で放鳥されました。平成28年現在、200羽を超えるトキが野生下で生息しており、中には、石川県まで飛来した個体も確認されています。



佐渡での野生放鳥の様子（環境省提供）



石川県に飛来したトキ

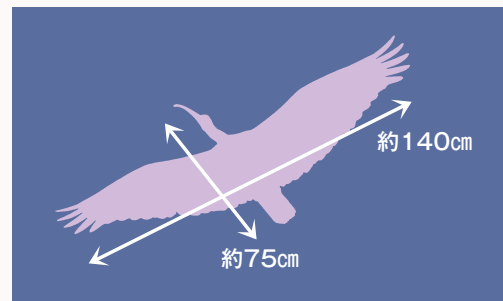
コラム トキってどんな鳥？

トキは学名を「*Nipponia nippon*（ニッポニア・ニッポン）」といい、かつて日本をはじめ中国、朝鮮半島、台湾などに広く分布していたサギに近い鳥です。

体長は約75cm、翼長約40cm、翼を広げると約140cmになります。体重は1.6～2kgほど。全身白色ですが、翼や尾はトキ色とよばれる美しいピンク色をしています。

トキの食べ物は湿地や水田に棲む生き物です。ドジョウやカエル、オタマジャクシのほか、バッタやコオロギなどの昆虫、ミズヤサワガニ、マルタニシなども食べます。穀物はいっさい食べず、完全な動物食です。

遺伝子調査の結果、中国のトキと日本のトキはほぼ同一種であることが判明しており、過去には大陸と行き来していた可能性も示唆されています。



トキの大きさ

3. いしかわ動物園での分散飼育開始から公開へ

◆ 分散飼育の受け入れ表明

トキは長らく佐渡島のみで飼育され、人工繁殖の取り組みが続けられてきました。しかし鳥インフルエンザなどの感染症が発生すると、1カ所だけの飼育では絶滅するおそれもあります。そこで国は、感染症等によるトキの再絶滅の危機の回避を図ることを目的として、平成15年12月に佐渡島で飼育されているトキの分散飼育の方針を打ち出しました。

これを受けて、石川県では平成16年の年頭にいち早く分散飼育の受け入れを表明しました。それ以降、受け入れ先のいしかわ動物園では、恩賜上野動物園、多摩動物公園等の専門家の指導を受けながら、トキの近縁種であるクロトキ、シロトキ、ホオアカトキの飼育に取り組み、人工繁殖に成功するなど、トキ類の飼育繁殖の経験を積み重ねてきました。これらの活動が評価され、平成20年12月に、国は石川県をトキ分散飼育実施地として決定しました。

平成16年に石川県がトキの受け入れを表明してから6年後の平成22年1月、いしかわ動物園でトキの分散飼育が始まりました。トキが石川県に里帰りのしたのは、昭和45年に本州最後のトキ「能里」が捕獲され、佐渡に移送されてからちょうど40年後のことでした。

◆ 40年ぶりに里帰りのトキ

平成22年、石川に4羽のトキがやってきました。すでに繁殖経験のある雄8歳と雌6歳の既存ペアと、雄5歳と雌2歳の新規ペアです。4羽のトキは、移送前日に佐渡トキ保護センターの飼育ケージから予備ケージに移され、当日の朝に輸送箱に収容、ワゴン車で運ばれました。佐渡から石川県までは2時間30分ほどの船旅もあり、北陸自動車道は雪の影響で速度制限がありましたが、1月8日午後5時35分に無事いしかわ動物園に到着しました。到着時はすでに暗くなっていたため、翌朝7時30分にトキ繁殖ケージに放鳥されました。放鳥された4羽のトキは警戒することなく、20分後には餌のドジョウを食べ始めるたくましさを見せ、スタッフ一同を驚かせました。



シロトキのヒナ



シロトキのヒナへの給餌



繁殖ケージへ初めて放鳥されたトキ

◆ 自然繁殖の成功から一般公開へ

分散飼育を開始して最初の繁殖期となる平成22年には個体数の確保を最優先課題として、ふ卵器による人工繁殖の取り組みを開始しました。平成24年からは第2段階として、親鳥が卵を巢外に捨てるなどの行為を防ぐために、人工ふ化させたヒナを巣に戻し、親鳥の注意をヒナに向けさせて安全に自然ふ化させる方式を試みています。

さらに平成25年4月には、飼育員がサポートしない完全な自然ふ化に初めて成功しています。このヒナはぐんぐんと成長。6月までには4羽が巣立ち、いしかわ動物園初の自然繁殖へとつながりました。繁殖したトキは基本的に佐渡へ返還し、飛翔、採餌などのトレーニングを行った後に、佐渡島内で野生放鳥されています。

平成28年9月、佐渡以外では初めてとなるいしかわ動物園での一般公開が決定されました。県と環境省、佐渡トキ保護センターによる調整により、いしかわ動物園で飼育されている15歳の雄と13歳の雌のペア、今年4月から5月にかけて生まれた雄2羽と雌1羽の計5羽が公開されることになりました。

トキの公開展示施設「トキ里山館」は六角形のケージを中心に構成され、そのケージを取り囲むように観覧経路が設けられています。また、トキを観察した後に、学習を一体的にできるよう、体験型の展示を充実させた学習展示コーナーを併設しています。



ヒナに給餌する親鳥



平成25年4羽の自然繁殖に成功した



トキ里山館ではトキが間近で観察できる

4. トキが棲みやすい環境を目指して

トキが生息するためには、ドジョウなどエサとなる生物が豊富な水田やため池、ねぐらとなる健全な森林が必要です。トキが再び石川の天空に舞うためには、今回の一般公開を通じて、トキを保護する環境づくりの大切さを一人ひとりが考えていくことが大切です。それが、石川県の生物多様性につながり、ひいては私たち人間にとっても安全で安心な環境と心の豊かさをもたらしてくれるのです。

いしかわ動物園にトキ里山館がオープンしました。

平成28年11月19日、いしかわ動物園にトキの公開展示施設「トキ里山館」がオープンしました。施設はトキが棲む里山の景観を再現しており、ケージ内に湿地や棚田状の地形が設けられています。本物のトキの羽根を触ったりできる体験型の展示など、トキの生態から歴史まで、楽しみながら学ぶことができる学習展示コーナーも併設しています。

施設の特徴

- ・トキが棲む里山の景観をケージ内に再現し、自然に近い状態でトキを観察。
- ・中央部には柱を設けず、トキの安全で自由な飛翔を確保。
- ・段差がない通路で子どもからお年寄りまで無理なく観覧。傾斜のある地形が多様な視点での観覧を実現。
- ・広い視野で観覧できるマジックミラー、止まり木のトキを間近で見られる野鳥観察舎風の「のぞき窓」など、よく見えるための工夫が随所に。
- ・体験型の展示を充実させた学習展示コーナーを併設し、トキの観察と学習を一体的に行えるよう配慮。

みどころ

いろんなトキの姿が観察できる4つの観覧ポイント 体験しながらトキのことが学べるコーナー



観覧ポイント①

トキの姿を見てみよう
広い視野で、開放的な空間の中を飛翔するトキの姿などを観察。



観覧ポイント②

トキの食事の様子
エサをついばむトキを間近に観察。泥の中のエサを効率よく探し当てる様子を見ることができる。



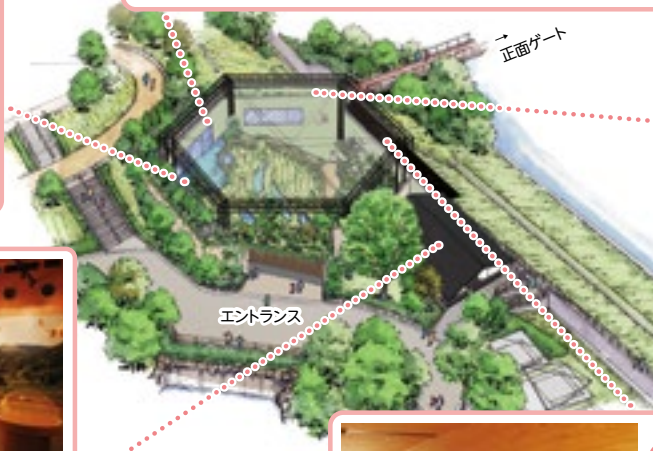
観覧ポイント③

トキの暮らしを知ろう
棚田風の湿地や樹木など、里山を再現した環境の中で、トキが暮らす姿を観察。



学習展示コーナー

トキのクチバシや足などをほかの鳥と比べたり、本物の羽根を触ったりしながらトキのことを学べる。



観覧ポイント④

トキのフィールド観察
野鳥観察舎風ののぞき窓から、止まり木で休むトキを間近に観察。